Stage Four
「戦場に翻るは青き旗」

「マチルダはいるか？」
「ミネアとあそこにいますよ」
解放軍のリーダーが己が身と武器以外の物を持っているのは珍しいことだ。そう思いながら騎士アレック＝フローレンスの指した先では、マチルダ＝エクスラインとミネア＝ノッドを中心に女性陣が賑やかに朝ご飯の支度をしていた。その中にはマンジェラ＝エンツォやシルキィ＝ギュンターに引っ張ってこられたのであろう、若い戦士たちの姿も混じっていて、朝食の時間が近いことを暗示してもいた。
そして、そちらに近づいていったグランディーナは先を引きずりそうな曲刀のほかに、使い古した槍を一本と大きな無地らしい青い布を抱えている。
「マチルダ。この布を旗に仕立ててくれ」
その場にいた全員がその一言で一斉に手を止めて、マチルダ以外の者はまた自分の仕事を続けた。朝食は古くて堅くなったパンと腸詰めと野菜のスープらしい。
「旗にとはどういうことでしょう？」
「周囲をかがってこの槍につけてくれればいい」
「旗って解放軍の旗ですか？」
ユーリアの言葉にグランディーナは頷いた。
「お待ちください。旗など作らなくても私はゼノビア王国の旗を持参しております。それを解放軍の旗にすればいいではありませんか」
「駄目だ」
マチルダが身動きするまでもなくグランディーナは即答する。気丈な彼女もそれで気をそがれた。
「ゼノビア王国の旗を持ち出してはならない。それは私が預かる。出せ」
二人のやりとりをユーリアが息を呑むような表情で見つめている。だが、それ以上騒ぎにならぬうちにマチルダの方が折れた。きれいに折り畳まれた旗を、グランディーナは無造作に脇に抱え込んだ。
「お待ちください。いい機会です。肩の抜糸をさせてください。もう問題ないでしょう」
「わかった」
マチルダの言うとおり、人狼シリウスに噛まれた傷は治っていた。だがいくら彼女が腕のいい治療者でもあれほどの傷痕が残らぬようにすることはできない。

「また傷が増えてしまいましたね」
「いまさら一つ増えたところで気にすることはない。終わったのか？」
「待ってください、もう少し」
マチルダの手が離れるとグランディーナはすぐに立ち上がった。彼女自身の言うように傷痕は数え切れない。それを周囲の者が気遣ってもいまさら、といなされるばかりだ。
「今日の昼飯後にゼノビア城攻略の話をする。旗はそれまでに仕上げておいてくれ」
「わかりました」
グランディーナがいなくなると、マチルダはそっとため息をついた。だが彼女はすぐに青い布地を広げて針と糸を取り出した。周りで賑やかに朝食を配っている声も耳に入っていないようだった。

白竜の月十日、ゼノビア城の真東に位置する城塞都市バイロイトの郊外が解放軍の野営地である。
ここから西にゼノビア城の城壁が見える。威風堂々としたその内には、現在はゼノビア王国の滅亡後、難民となった人びとが押し合いへし合いして住み着いており、二四年前の栄華など微塵も感じさせないスラム街を形成している有様だ。ゼテギネア大陸でいちばん優美な都と言われた面影はない。
ヴォルザーク島を発ってから一ヶ月以上がすでに経過していた。それでも解放軍は当初の目的の一つに達したのであった。

「明日からゼノビア攻めですか？」
「アラディか。あまり気配を隠して近づくな。斬るかもしれないぞ」
「そんなへまはしませんよ」
そう言って彼は邪気のない笑顔を見せた。
「有名人についてお二人、情報をつかんだので戻りました。一人はゼノビア王国元騎士団長アッシュ＝クラウゼン殿、もう一人はゼノビア王国第二皇子フィクス＝トリシュトラム＝ゼノビア殿です」
「アッシュというのはグラン殺害の張本人か？ウォーレンやランスロットたちに知られたら黙っていないだろうな。どこにいる？」
「そこのバイロイトに幽閉されています。ゼノビア王国以前から強固な監獄があったので有名ですから。トリスタン皇子はゼノビアにはいないようですが生存は確実です」

グランディーナは城塞都市に視線をやったが、すぐにそらした。バイロイトはかつて小ゼノビアと呼ばれたほど堅固な構えが特徴である。だが都市の中心はアラディの言う監獄であり、それはゼノビア王国よりもよほど古いのだった。

「皇子の噂はどこで聞いた？」

「ゼノビア城の西にカルロバツという町があります。そこに貴族たちの生き残りが隠れ住んでいるんです」

グランディーナは少しだけ考え込んだ。

「ゼノビアはもういい。このままアヴァロン島に渡って状況を教えてくれ」

「承知しました。バインゴインでお待ちしてます」

アラディは一礼して歩き去り、グランディーナはバイロイトに向かった。彼女はいまだにマチルダから取り上げたゼノビア王国の旗を持ったままであった。

だがバイロイトの門は解放軍を名乗るグランディーナに門戸を開こうとしなかった。

それで彼女はいったん野営地に戻り、まずウォーレンを見つけると旗を押しつけた。

「これを使われるのですか？」

「しまっておけ。マチルダに旗を作らせている。ランスロットと一緒に来てくれ。あなた方に会ってもらいたい人物がいる」

「明日からゼノビア攻めでしょう？　それよりも優先させる必要があるのですか？」

「ゼノビアの話は昼飯後だ。会えばわかる。グリフォンを使おう。行くぞ」

ウォーレンもランスロットも目を白黒させながらもグランディーナの強引さに慣れてきたものとみえ、黙ってグリフォンに騎乗した。彼女が「会えばわかる」と言い切ったこともあって、わざわざ訊かなくてもいいだろうという判断も働いている。

グランディーナはエレボスを操り、野営地のすぐ近くに見える城塞都市（バイロイト）のなかでも、ひときわ目立つ建物のすぐそばに強引に突っ込んだ。ポリュボスとシューメーがそれに続く。エレボスのいいところは無条件に魔獣を従わせられることだ。このグリフォンが行くところにどの魔獣も従う。

「バイロイトの監獄というのはここか？」

「そうだが、おまえたちは何者だ？」

「私は解放軍のリーダーだ。バイロイトに入ることを断られたが、ここの囚人に用がある」

言うなりグランディーナは曲刀を抜き放った。

「な、何をする気だ？　ここがゼテギネア帝国の管

轄下と知っての行動か？」
そうは言ったものの、守備兵は事態を察したらしく脱兎のごとく逃げ出した。
「そこまでして助け出す必要のある囚人がここにいるのか？」
やっと事情を呑み込んだランスロットが言ったが、グランディーナは刀を収めて建物の中に踏み込んだ。
だが鍵の束を取り上げて片っ端から牢獄の扉を開けまくっても使われていたのはそのうちの一つだけであり、彼女はそこに入っていく。後を追った二人はそこにいた囚人の姿にどちらも驚きを隠せなかった。
「団長ではありませんか！　生きておいでだったのですね?!　よくぞご無事でいてくださいました！」
「そなた、ランスロット＝ハミルトン、か？」
ランスロットは団長と呼びかけた男の前に恭しく片膝をつき、頭まで下げた。
「よく覚えていてくださいました。あなたに従騎士叙位をしていただいたランスロット＝ハミルトンです。団長、あなたはとうにゼテギネア帝国に処刑されたものと思っていました。このようなところに囚われておいでと知っていたならばもっと早くお助けに来ましたものを、申し訳ありません！」
「わしがここにいたのが何のためであるか知っていて、そのような口がきけるか、ランスロット？」
「存じております。ですがわたしは信じておりません。団長が最も敬愛される陛下を暗殺されるなど、あり得ないではありませんか！」
「積もる話も多いようだがここを出てから話してはどうだ。あの様子では帝国兵も戻って来なかろう」
「そなたは何者だ？」
「私はグランディーナ。解放軍のリーダーをしている。この二人も解放軍の一員だ」
鋭い眼光がアッシュから放たれた。身長はランスロットよりわずかに高い。だが枯れ木のように痩せていて節くれ立った手はずっと大きく、元ゼノビア王国騎士団長という肩書きに恥じぬ威圧感はランスロットとは比べものにならなかった。
だがグランディーナはその視線を軽くかわした。ウォーレンもランスロットもそれは予期していたことだったが、彼女とアッシュとのあいだにはわずかな緊張感が走る。
「彼女の言うとおりです、まずは外に出ましょう。ここはあなたのような方がいらっしゃるところではありません」

「なぜそう思う？　ウォーレン＝ムーン、そなたとて、わしの罪を知らぬわけではあるまい？」
「存じております。ですが、わたしもランスロットのようにあなたのしたことなどとは信じておりません。グラン王を殺した者は別にいるはず、あなたとて、それをご存じでいながら理由があって獄に繋がれていたのではありますまいか」
アッシュは黙した。それに勢いづけられてウォーレンは言葉を続ける。
「沈黙もまたひとつの回答です、アッシュ殿。どうかご存じのことをお話ください。わたしたちの敬愛するグラン王の名誉のためにも、あなたは無実を晴らされなければなりますまい。陛下が、最も信頼されていた騎士団長に暗殺されたなどという不名誉があっていいはずはありません。あなたがご無事であったいまこそ、その汚名は濯がれるべきです」
ウォーレンの隣で立ち上がったランスロットが力強く頷いた。グランディーナは一足先に牢を出る。
「外に出て話すとしよう。ここは暗い」
「それでは鍵を」
「必要ない。わしはこのとおり、鎖に繋がれてなどおらぬよ」
「は、はいっ」
暗い獄から表に出ると、日差しがまぶしかった。ほんの数分入っただけのウォーレンやランスロットでさえそうなのだから、長年閉じ込められていたアッシュには目を刺すようなほどと推測される。現に元騎士団長は目の上にかざした手を長いこと下ろそうとはしなかった。
しかしバイロイトの牢獄には座って話せるような気の利いた中庭もなく、四人は建物を出た。
突然上空から侵入した三頭のグリフォンと逃げ出した帝国兵に周辺の住人が何事かと集まっていたが、入り口にエレボスが立ちはだかっているために近づけないでいる。
「このまま野営地まで戻るか？」
「それが良かろう。ここでそなたたちに話し、またここにいない者に話すのでは二度手間だ」
「ならば、あなたには私と同乗してもらおう。エレボスならば二人乗せても速度は落ちまい」
グランディーナの言葉にアッシュは頷いた。
ランスロットとしてはぜひ憧れの騎士団長と同乗したいところだったが、シューメーでは二人乗せると極端に速度が落ちるし、エレボスは彼を受けつけないの

で反対しようがなかった。
「我々は解放軍だ。二、三日中にゼノビア城からゼテギネア帝国を追い出す。腕に覚えのある者はいつでも来るがいい！」
聴衆の返事を待たずにグリフォンは飛び立った。
牢獄を中心に小さくまとまったバイロイトの町は眼下に小さくなり、解放軍の野営地に張られた天幕がすぐに目立つようになった。
「そなたはゼノビア王国の者ではないのか？」
「縁もゆかりもない。だがウォーレンたちとは縁あってヴォルザーク島から行動をともにしている。あなたがバイロイトにいることを知って彼らを連れてきたがあの反応は想像もしなかった」
アッシュが返答しなかったのはグリフォンが次々に着陸したためばかりでもなかったろう。エレボスを降りて彼は少しよろめいた。
「大丈夫ですか、団長？」
ランスロットが文字どおりすっ飛んできて手を出したが、アッシュはそれを断った。牢獄で老いさらばえ、長の月日もその肉体を衰えさせはしたが、誇りだけは失っていないとでも言いたげで、ランスロットは若造のように気落ちする。
「わしは一人で歩ける。それよりもそなたたちにひとつ頼みがある」
「何なりと」
「わしのことは二度と団長などと呼んでくれるな。王亡き後、おめおめと生き延びて何の騎士団長ぞ。わしの無事などむしろ生き恥よ。わしがそなたたちとともに行くのは元ゼノビア王国騎士団長としてではない。一介の戦士としてだ」
「心得ました」
ウォーレンも頷いて、三人の視線がグランディーナに向けられたが、その答えはやはり素っ気なかった。
「反対するいわれはない」
不意にシューメーが鳴き声をあげた。ウォーレンとランスロットは、その声で解放軍の各リーダーたちが集まっていたことに気づいた。
いきなり三人で、しかもグリフォンで出かけたものだから、よほどの重大事態発生と思われたのかもしれない。だが元騎士団長の救出とあっては、それもあながち間違いとは言い切れない。
現にアッシュを直接知っていそうな世代の者は、突然現れた元騎士団長に相当驚いたふうだ。
「生きていたのか、あんた」

皆の心情を代表するように言ったのはカノープスだ。
「おめおめと生き延び、そなたたちには生き恥をさらすことになった」
「あんたの恥なんてどうでもいい。だが王を暗殺したのは本当にあんたなのか？　俺だって帝国の奴らの吹聴なんか信じてるわけじゃねぇ。だけどあんた自身の口から本当のところを聞きたいし、そうでもしなけりゃ納得できねぇ。王を殺したのは誰なんだ？」
「わしではない。誰がやったのかは知らないが、わしの役目は騎士団長として陛下とお二人の皇子、それに王妃さまをお守りすることであった。それが果たせなかった以上わしがやったも同然だ、わしも同罪だ。罪は償えぬ、たとえこの身があのまま牢で朽ち果てようとも罪は消えぬ。だがこうして助けられた。ならばせめて一介の戦士としてそなたたちとともに参り、ゼテギネア帝国との戦いに死地を求めることが我が願い、我が望み、わしがここにいるのはそれだけのためよ」
「アッシュさま、そのようなことを仰らないでください。私たちは、ゼノビア王国騎士団縁の者は皆、一族を奪われ、路頭に迷い、それでもゼノビア王国の再建を夢見てまいりました。アッシュさまがともにおいでくださることで私たちがどれほど勇気づけられているか、どうかお察しください」
「そなたの名は？」
「ポリーシャ＝プレージと申します。父はマイヤー、母はサマンサ、ともにゼノビア王国騎士団の一員でありました」
「マイヤー＝プレージとサマンサ＝プレージ」
アッシュがつぶやき、しばし黙り込む。そのあいだに進み出たポリーシャはその手を固く握りしめた。
「わしが覚えているそなたは六歳の幼子であった。母のような槍騎士になるのだと舌足らずに言ったな、あのポリーシャか」
「はい！」
それをきっかけにアッシュを中心に人の輪が厚くなった。近づいていかぬのはグランディーナとカノープス、それに先に再会を果たしたウォーレンとランスロットだけであった。
「俺はグリフォンを休ませてくる。城攻めの話はいつするんだ？」
「あれが済んだらだから昼飯後だな。途中までつき合おう」
心得たようにウォーレンが頷く。ランスロットはこっそり鼻をすすり上げた。

騎士団長アッシュ＝クラウゼンは神帝グラン王ともどもゼノビア王国の両輪であった。二四年前、グラン王と第一皇子ジャン暗殺の咎によりアッシュはその地位を追われた。ハイランド王国侵攻前より両輪を失っていたゼノビア王国には、魔法軍団と魔獣軍団が残っていたとはいえ戦わずして勝負はついていた。ゼノビアは負けるべくして負けた。

神帝グランを戴いたゼノビア王国がハイランドに屈すれば、ほかの三王国、ドヌーブ、ホーライ、オファイスにそもそも勝ち目はない。抵抗は散発的なものにすぎず、ゼテギネア帝国の建国まではわずか戦乱勃発より一年後のことであった。

「アッシュの人気は大したものだな。俺も話を聞いた時には半信半疑だったが、もしかしたらと思わなくもなかったんだがな。ギルバルドは端からアッシュだと信じてなかったが。だが二四年もの牢暮らしじゃ、あの剣の冴えはもう期待できないだろうな」

グランディーナは相づちを打つでもなく丈の長い草の葉を弄んでいた。その眼差しは西方、ここから二日のところにあるゼノビア城に向けられている。

「おい、どこ行くんだ？」

「つき合うのは途中までと言ったろう」

グランディーナがカノープスから離れていくのと彼とグリフォンに気づいたギルバルドとユーリアが近づいてきたのはほとんど同時だった。

「どうしたの、兄さん？　少し恐い顔だわ」

「グランディーナ殿たちの用は何であったのだ？」

ユーリアが来ると、グリフォンたちは甘えるような仕草で頭を下げた。魔獣に好かれやすいのは有翼人の特性だが、そのなかでもユーリアは別格らしい。決まった人しか近づかせぬエレボスさえ元々の飼い主とはいえおとなしくなるのだから、ほかの魔獣にいたっては何をか況やである。そして彼女も魔獣たちを可愛がる名人なのだ。決して兄の贔屓目ではなしに。

「そこの牢に元騎士団長殿が囚われていたのさ」

それだけで二人は驚きの声をあげて顔を見合わせた。

「生きておいでだったのね」

「アッシュ殿はやはり無実であったろう？　その話は当然されたのだろうな？」

「ああ、おまえの言ったとおりだったよ。だが真犯人はアッシュも知らないそうだ。おおかた帝国の奴らだろうがな」

「卑怯なことをするものだ。それなのにアッシュ殿はずっと牢獄に繋がれていたのか？」
カノープスは頷いた。
ユーリアが眉をひそめる。
「アッシュ殿にしてみれば、さぞ無念であられただろう。人一倍自分には厳しい方だ。王ばかりか妃殿下もお二人の皇子もおいでなければ、たとえ無実だとて外に出る意味もなかったに違いない」
「アッシュさまの家はゼノビアでも筆頭のお家柄でしたものね。でもクラウゼン家の方々も処刑されたと聞きましたけれど」
今度はギルバルドが頷いた。彼とユーリアのあいだに昔を懐かしむ空気が漂う。
旧ゼノビア王国の貴族層はその大半が騎士団・魔法軍団・魔獣軍団の隊長以上に属する者ばかりであった。だが残っているのは魔獣軍団に所属していた者だけで騎士団と魔法軍団に所属した家柄はギルバルドやカノープスらの知る限りではほぼ壊滅と言ってもいい。
現在解放軍にいるランスロット、マチルダ、リスゴー＝ブルック、ポリーシャは数少ない貴族の生き残りだが、当時、成人していなかったという点、血族が一人も生き残っていないという点においては貴族などとはとても呼べなかった。そしてウォーレンにいたっては王に誓う忠誠は本物と認められていたが生家はしれなかったのである。
「だが解放軍のように若い力は確実に育っている。貴族がいないからといって国の再建にもそれほど案ずることはあるまい」
「そうですよね」
「昼飯の後にゼノビア城攻略の話し合いだそうだ。遅れるなよ」
「承知した」
「兄さん、どこへ行くの？」
「散歩だよ、散歩！」
上空に飛び上がると目指すそれはすぐに見つかった。その足の速さに舌を巻きながら、カノープスは一、二度羽ばたく。あとは滑空するだけの距離だ。
グランディーナの傍にいた二人の影がカノープスが降りてくると片膝をついた。
「ご苦労だった。ゼノビア城を落とすまで休め。次はディアスポラだ」
「承知しました」
ライナスが答えて二人は去る。カノープスは二人と

話したことがないのを思い出したが、いまは後回しだ。
「何だ、もうおしまいか」
「敵戦力の確認だ。大した話は残っていない」
「いよいよゼノビア城の奪還か。腕が鳴るじゃないか。だがここは敵さんも易々と、とらせてはくれないだろうな」
カノープスは言いながら指を鳴らした。二四年ぶりのゼノビア城だ。そこをよく覚えているだけに興奮は抑えようがない。それだけにグランディーナの素っ気ない物言いが多少気に入らなかったのは事実だ。
「とれる。ゼノビア城を落とすまではたやすい」
「大した自信だな。その落とすまでってのが引っかかるけど、どういうことだよ？」
「後で話す」
「肩肘突っ張ってんなよ。おまえ、誰かに愚痴を言いたくなることないのか？　アッシュのことだって何か言いたかったんじゃないのか？」
「愚痴ってる暇があったら先のことを考える。ゼノビアの次はアヴァロン島、それから戻ってきてホーライ、マラノ、ドヌーブ、オファイス、ハイランドはずっと先だ。それに言っていなかったな、ゼノビア城にいるのは四天王の一人クアス＝デボネアだ」

当然カノープスにもその名は聞き覚えがあった。軍事力に優れた旧ハイランド王国、その総司令官は大将軍ヒカシュー＝ウィンザルフ、ハイランド王家に勝るとも劣らぬ名門貴族で、剣の腕にも優れ、ゼノビア王国にアッシュ＝クラウゼンありと言われれば、ハイランド王国にもヒカシュー＝ウィンザルフありと言われたほどの実力者だ。その大将軍が特に剣技に優れた四人を選び出して四天王の名を冠し、将軍という重職を与えるようになったのはゼテギネア帝国の代になってからのこと、もっとも四天王の二人は数年前に代替わりしたばかりで、それがクアス＝デボネアとカラム＝フィガロであった。
「四天王って、そんな大物がゼノビア城にいるっていうのか？」
グランディーナは答えず早足で野営地に戻っていく。その背はそれ以上の説明を拒絶していたが、カノープスはかまわずに飛んで追い越した。
彼女は強引に通り過ぎようとしたが、彼は羽さえ広げてそれを許さなかった。だがグランディーナの表情にも口調にもいらついた素振りは見えない。初めて出会った時のように、二度目にユーリアと来た時のように冷静な視線を向けている。

「あなたもランスロットと同じことを言うつもりか。リーダーが安全なところにいてもいいのは負けても軍を立て直せる正規軍の場合だけだ。我々の規模で負けは許されない。我々が負ければ次はない。ならば勝てる駒を最大限に使う。剣の腕で解放軍に私に勝てる者がいるか。シリウスの時もそうだったが高邁(こうまい)な騎士道精神だけで勝てると思っているわけではあるまいな」

しかしグランディーナの意に反してカノープスは上げた手を下ろし、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「何だ？」

「俺はランスロットと違う。騎士道精神なんてものとは縁がないし、自分だけ安全なところにいたがるリーダーも好きじゃねぇ。だけどおまえの本音ってやつを知りたかった。意地悪しちまったな」

さっきよりも早足でグランディーナは歩き出し、カノープスも飛びながら追いかけた。

「あなたもお節介だな。私のことなど放っておけばいいだろうに」

「これが俺の性分なものでね。それにどうせ肩持つなら若い方がいいしな」

「それでややこしい立場にならぬよう願う。だが続きは後で話そう」

「俺の人徳、知らねぇんだからなぁ。ややこしい話になんかなるものか。だいたいおまえは笑わなさすぎんだよ。ちょっと笑ってみろ、男なんてそれだけで女の言うことを聞くものだぞ」

「これが私の性分だ。それに皆に好かれるリーダーなど、いまは要るまい。必要なのはゼテギネア帝国を確実に倒せる力だ」

「倒せるのか？　俺たちの戦力なんて帝国の何十、いいや何百分の一かだぞ」

「少ないならば少ないなりの戦い方がある。正面切って戦うだけが戦争じゃない。それにゼノビアを出れば志願者はまだ増えようし解放軍に加わらなくても同調する者も出よう。帝国は倒せる」

「それで、おまえはゼテギネア帝国を倒したら、どうしようっていうんだ？」

「引き際は間違えないつもりだ。いまはそれ以上、言えない。だが戦争屋が戦後のことを心配しても仕方があるまい？」

カノープスは応えるかわりにちょっとだけため息をついたが、グランディーナはそれで話が済んだものと考えたようだ。

その時、二人の前方で青い無地の旗が翻った。

掲げているのはカリナ＝ストレイカー、周りには若者たちがいて歓声を上げている。マチルダが縫い上げた物をシルキィあたりがめざとく見つけたのだろう。

彼女らは同じゼノビア王国の者とはいってもカリナ以外はその時代を直接知らない。ポグロムの森の虐殺に遭ったカシム＝ガデムやシルキィ、マンジェラが最年長で、あとはゼテギネア帝国が興ってから生まれた者ばかりなのだ。それだけにゼノビア王国への郷愁はないのだろうし、解放軍の旗として示されたそれを素直に歓迎もするのだろう。

「あっ！　グランディーナさま、カノープスさん、見てくださいよ！　さっきマチルダさんが見せてくれたんです。解放軍の旗ですって！」

元気なマンジェラは臆すことなくグランディーナの手を引っ張っていった。一緒にやってきたシルキィはカノープスの腕を捕まえた。

二人に見つけられてカリナが照れくさそうな笑みを浮かべたが、その場に集まった若い戦士や魔法使いたちも思わぬリーダーの出現に驚いたようだ。

「気に入ったか？」

グランディーナが珍しく和んだ表情で言った。

「もちろんですよ！　旗がなくちゃ格好つかないじゃないですか。俺たち正真正銘の解放軍なんだなぁってみんなで言ってたところです」

真っ先にそう言ったのはカシムだ。ポグロムの森での一件以来、彼は若い者のなかでも一目置かれているがエマーソン＝ヨイスとのよりはじきに戻したらしい。もともと後に引かないのが彼の長所だ。

「青は呪術的にも成長や若さを示す色です。僕たち解放軍には相応しいと思いますね」

「またエマーソンの悪い癖！」

「すぐ知ったかぶりして蘊蓄（うんちく）たれるんだから！」

「本当のことだ、君たちに揶揄（やゆ）される覚えはないね。グランディーナさまだってご存じでこの旗にしたんでしょう？」

「そうだ。それだけが理由でもないがな」

「へぇぇ」

「この先、ドヌーブやホーライ、オファイスの生き残りが入るのを計算してのことだろう？　ゼノビアの旗じゃゼノビア対帝国って形になっちまうし、ほかの国の奴らが肩身の狭い思いをすることになっちまう」

「そうだ、と言いたいところだが足りない。ハイランドを忘れている。アヴァロン島やマラノ、ともに戦う意志のある者ならば誰でも歓迎する」

「へぇぇ」
さっきはシルキィだったが、今度はマンジェラが頓狂な声をあげた。その場にいた若者たちも一斉にグランディーナに視線を向ける。カノープスの意見にも感心したが、それ以上にリーダーの言うことは刺激的だ。
「アヴァロン島やマラノはわかりますけど、ハイランドっていうか、帝国は敵じゃないんですか？　俺たちは帝国を倒すために戦っているんですよね？　そのなかに俺たちに味方してくれる人がいますかね？」
魔法使いのウィングス＝イースタリーが不満そうに言った。カシムの方が目立って、つい忘れられがちだが、本人も自分の地味なことは察していて仲のいいワイルダー＝ホーナーと控えめにしている。
「勘違いするな。帝国は敵だが、そこにいる者全てが敵というわけじゃない。やむをえず帝国に従っている者もいるだろう。旧王国の者もいる。我々の意志に賛同するのなら私は誰でも解放軍に迎えるつもりだ」
「そうだよ！　俺たちだって帝国の兵士だったんだから。帝国にだっていい奴はいっぱいいるさ」
ヴィリー＝セキ、アルベルト＝ブラッドフォードはフェルナミアにいた帝国兵、ビンセント＝ハンナとバイソン＝ロイスターはダスカニアにいた帝国兵だ。そのことは皆が知っているだけにアルベルトの発言は信憑性を持っていた。同時に彼らは、さすがはリーダーと感心したように頷きあって、いろいろな意味の込められた旗を今度は感慨深げに見つめた。
「あなた方が思い描くのはどんな国だ？　ゼノビアの旗ならばゼノビア、ゼテギネアの旗ならばゼテギネアしか思い描けないだろう。だが無地の旗ならば、それができる。あなた方の知らない国の形がある。国を作るのは、結局、一人ひとりの民だからな」
「そんなこと、考えたこともなかったな」
「だってゼノビア王国のことなんか知らないもん。知ってるのはゼテギネア帝国だけだわ」
「ポグロムの森のことがあるから自分がゼノビア人なんだって思ってた」
「ならば、これから考えろ。そして話し合え。状況に流されるな。大切なのは国を作るという自覚だ。たとえ神帝がいても国を支える者がいなければ国とは呼べない。もっとも国などなくても人は生きていける」
「新しい国には当然グランディーナさまもいるんですよね？」
「さあな。明日からゼノビア攻めだ。よく休め」
「はいっ！」

「カリナ、旗手はあなたに任せる。敵に奪われるな。そのうちに増やすかもしれないがいまのところ、それしかないからな」
「承知してますよ。今回はゼノビア城のてっぺんにこの旗を翻してみせますとも」
最後に誰に言われたのでもなく、カリナは旗をしまった。旗持ちを任されたので出しっぱなしにしておくのがもったいなくなったらしい。それをきっかけにグランディーナとカノープスはその場を離れた。
「旗のこと、ウォーレンたちは知ってるのか？」
「ウォーレンだけだ。マチルダがゼノビアの旗を持っていたが取り上げた。ウォーレンに話したのはそれを渡した時だ。ところであれはあなたの本心か？」
「当たり前だ。どうしていまさらゼノビアの旗にこだわるものか。それにゼノビア領はここまでだ。この先、ゼノビア人を加えることはほとんどなくなるだろうしな。おまえだってそのつもりなんだろう？」
「ゼノビアに限らずどの国の旗も使いたくない、それだけだ。解放軍に旗は要らないと思っていたが、城を落とすのに格好がつかない。だから旗を作らせた」
「ややこしい立場ってのはそういうことか」
「それだけでもないがな」
「うまいごまかしじゃなかったな。あいつら、おまえを女王にでも担ぎかねないぞ」
「まさか。そんな状況になるものか」
若手の兵士たちと話していた時の和んだ様子は離れた途端に引っ込んだ。いつもの無愛想な、本心を悟らせぬ彼女に戻っている。
「それはそうと、やればできるんじゃないか」
「何の話だ？」
「もっと笑えって言ったろうが。そうでなくても戦争なんか不慣れな奴ばかりだ。そんな面で話してみろ、出る意見も引っ込んじまう。あの嬉しそうな顔を見ただろう？　そうだ、あいつら、今度、おまえに剣を教えてもらいたいと言ってたぞ」
「それは断る。人に教えたり、教わるのは苦手なんだ。騎士の剣ならばランスロットに教わればいい」
「何言ってるんだ。誰でもいいってものじゃないんだよ。それにそういう時は剣を合わせるだけでもいいんだぞ。若い奴らには何でも勉強になるものさ。必要なのは経験なんだ」
「私のは殺人剣だ。覚えても役には立たない」
そう言ってグランディーナには珍しく自嘲気味な笑みを浮かべる。

それがあんまり意外だったのでカノープスは即座に否定できなかった。
「ば、馬鹿も休み休み言え。武器を取るのにその覚悟のない奴がいるかよ。それに攻撃するだけじゃない。武器はかけがえのない人を守るための物でもあるだろうが？　おまえだって初めて武器を取った時にそうじゃなかったとは言わせないぞ」
「そういう意味じゃない」
「じゃあ、どういう意味だって言うんだよ？」
彼女は答えなかった。目をそらした表情から自嘲気味なところは消えていたが、その眼差しはどこか頼りなげで、それでカノープスもつい、追求しそびれる。
「ところでおまえ、どこ行くつもりなんだ？」
「昼飯だ。朝飯を食いっぱぐれた」
これにはカノープスも空いた口が塞がらなかった。

「デネブ、ここにいたのか」
「あーら、珍しい組み合わせね。あなたの後ろに金魚の糞みたくくっついているのは騎士さんだけだと思ってたわ」
「昼飯を持ってきた。つき合わないか？」
「あら、気が利いてるじゃない。マチルダさんだっけ？　料理がうまくてうらやましいわぁ」
デネブは例によって四人のパンプキンヘッドを従えていたが、至極退屈そうに頬杖をついていて、グランディーナとカノープスを見つけると顔をほころばせた。
「金魚の糞みたいな騎士って、ランスロットのことか？　あいつが聞いたら怒るぞ、本人は真面目にやってるんだから」
「なに言ってるのよ。いい歳して真面目にやってれば許されるってものじゃないでしょ。真面目にやってるなんて、できない人の言い訳よ」
「あ、そう」
「案ずるな。ランスロットもいままでのようにはいかない。尊敬する騎士団長のお出ましだからな」
「あいつがアッシュを尊敬しているのは事実だが、そんなに簡単に剣を引っ込める奴か？　ランスロットにそんなこと言ったら『騎士に二言はない』なんて言い出すと思うけどな。おまえに剣を捧げたんだろ？」
「私はそんなことは気にしていないし盾に取る気もない。騎士の大事なものは一に国だろう」
「騎士騎士って馬鹿の一つ覚えじゃあるまいし、うるさいわねぇ」
「文句があるならランスロットに言えよ。騎士にこ

だわってるのはあいつなんだからな」
「あら、自分には無関係だって言うの？　あなたって意外と友達甲斐がないのねぇ。可哀想なランスロット、彼が聞いたらがっかりするでしょうねぇ」
「おいおい勘弁してくれよ。俺は騎士じゃないし、騎士騎士うるさいって言ったくせに」
食器を置いたグランディーナは忍び笑いを漏らしただけだ。カノープスの皿もデネブのそれもまだ半分以上、残っているのに彼女は一人だけ空っぽにしてしまったのだ。
「早食いは美容に良くないわよ。ゆっくり味わっていただかなくっちゃ。なんていったって、こんなに美味しいんですもの」
「癖だ。たとえ正餐を並べられても、すぐに平らげないと気が済まない」
「おまえが正餐の食べ方を知ってるとは、そっちの方が意外だよ」
「何言ってるのよ、カノープス。彼女だったら何知ってても不思議じゃないわ。
ねぇ？　でも若い身空でお気の毒。だからこんなにお肌も荒れちゃってるのね。可哀想ね。あら？　あらあら？　まさか、あなた、すっぴん？」
「なんか話がつながってなくないか？」
「化粧して戦争ができるか」
「まぁ、まぁぁ！」
デネブは突然グランディーナの顎を軽く捕らえて、強引に自分の方を向かせた。
思わぬ展開にカノープスも手を止める。
「あなた、若いと思って高くくっていたらお肌の曲がり角はすぐそこよ。そうでなくてもしょっちゅう陽にさらされているんですもの、大事にお手入れしなくちゃ。女の子はもっとお肌を大切にするものだわ。化粧だけじゃなくて後のお手入れが大事なのよ。もしかしてお化粧の仕方とか知らないんじゃないの？　あらやだ。ほんとにすっぴんなのね。それにひどく荒れてるじゃないの」
「離せ、デネブ」
「じっとしてなさいよ。特別に講座してあげるわ。あたしの使ってる化粧品と道具も貸してあげる。わざわざマラノから取り寄せてる特注品なのよ。紅燭化粧品店て知らないの？　お姉さんの一押しよ。
あら、皆さん、お揃いで」
そこへウォーレンを筆頭にグランディーナを探していたのであろうリーダーたちが揃ってやってきた。

勢い余ってグランディーナにのし掛かりかけていたデネブはすぐに離れたが、来た面子が騎士ばかりだったこともあってか、どうにも視線は冷たい。

「そろそろゼノビア城攻略の話をされたいのではないかと思いましたが、昼食中とはお邪魔でしたか？」

「馬鹿を言え。適当に座れ」

すでに座を占めていたグランディーナとカノープス、それにデネブ以外の面々は自然と車座になった。

その場にいるのはウォーレンのほかにアッシュとランスロット、リスゴー、アレック、ガーディナー＝フルプフ、マチルダ、ポリーシャである。さらにギルバルド、ロギンス＝ハーチ、ニコラス＝ウェールズが加わって、解放軍のリーダーはこれで全員だった。

「始める」

グランディーナ一人が立ち上がった。

「明日からゼノビア城の攻略に入るが、現状を簡単に説明しておく。ゼノビア城はここから西に徒歩で二日、周囲を壕と城壁に守られた堅固な城だ。城壁の門は東西南北に一つずつあるが、最近は跳ね橋が上げられどおしで使われているのは南門だけ、これも開けるのは毎日、昼間の数時間だけだ。城壁の内側はかつての城下町だが二四年前から避難民が押し寄せ、現在はスラム街だ。元の建物の破損はひどくないようだが、継ぎ足された建物が通りにまであふれ出してかなり歩きにくい町だ。地震でも起きればひとたまりもないだろう。帝国軍は城と城壁を占拠していてスラム街の存在は黙視だ。たまに食料の供出などもしているそうだが占領軍の性格上、人心をつかむには至っていない。

これらのことから次の理由によって城攻めは行わない。一つは城攻めそのものが我々に不利な戦法であること。守備側の十倍の戦力をもってしても城は落としにくく、我々の人数は帝国軍よりも少ない。ましてゼノビア城は壕と城壁で三重に囲まれている。城攻めで落とすのはほとんど無理だろう。いま一つには城壁の出入り口を封鎖して兵糧攻めを行えば、効果が出るのに時間がかかる上、帝国軍よりもスラム街に集った住民に先に被害が出てしまう。さらにあの壕のために地下道を掘るわけにもいかないし、跳ね橋を上げられたら壕を越えるのも困難だ。つまり正攻法でゼノビア城を落とすのは至難の業だと言える。できたとしてもかかる時間は膨大なものになるだろう。それでは敵に反撃の隙を与えることにもなる。

次にわかっている敵の戦力について話す。敵将はクアス＝デボネア、知っていようがゼテギネア帝国四天

王の一人で一年ほど前からゼノビアにいる。だが主力は魔獣で将軍直下の騎士団はゼノビアに来ていない。そのためにデボネアはエンドラに疎まれて左遷されたという噂も立っているが、その戦力は我々より上だ。正面からまともにぶつかって勝てる相手ではない。魔獣の構成は我々と似たようなものだ。グリフォン、ワイバーン、コカトリスと飛行魔獣が揃っている。ほかに若干のドラゴンとストーンゴーレムの存在も確認されている。

しかしゼノビアを落とすのに時間をかけたくない。ゼノビアは旧王国の首都だし、それ以上にグラン暗殺の地ということもあって帝国、反帝国の双方から注目されている。ゼノビアを落とせば帝国は我々の存在を無視できなくなる。つまりこの先の反撃が厳しいものになるということだ。だが同時に反帝国を願う勢力も我々に同調するだろう。シャローム地方に義勇軍がいたことがあったが、似たような勢力は各地にいようし、これが最後の機会になることも承知しているだろう。解放軍に加わらなくともその援助は心強い。そのためにもゼノビアは速攻で落とす必要がある。そうすれば我々が反帝国の筆頭であるという実証にもなるし、時間をかければ帝国には援軍を呼ぶという手もあるのだからな」

そこでグランディーナはいったん言葉を切った。皆の顔をひととおり見渡し、状況が把握できたのを確認してから続きを話す。

話しているあいだにカノープスもデネブも食事を終えていた。

「戦は敵将の首をとるか本拠地を奪えば勝ちだ。だが城壁の守りは堅いし敵も城から安易に外には出るまい。そこで空から攻めて同時にこれをとるが、当然、敵も空中からの攻めは予想していよう。それで今回は部隊を三つに分ける。デボネアは私が倒す。だが敵の魔獣部隊に遮られるのもおもしろくない。そこで先導をウォーレンとデネブ、あなた方に頼みたい。ウォーレンは魔法使い二人と人形使い二人を連れていけ。魔獣には魔法の方がよく効く。デネブはその補助だ。戦端を開いてくれれば後は勝手に斬り込む。その後をギルバルドが魔獣部隊を連れて牽制してくれ」

「そなたが一人で斬り込むつもりか？」

そう訊くのはいつもならばランスロットだが、今日はアッシュだった。もっともグランディーナとデネブ以外の全員が似たような疑問は抱えていただろう。

「一人の方が動きやすい」

「そなたは空から攻めると言うが、こちらの魔獣の数には限りがあろう。多少、魔法で落としても帝国軍より数が少ないのは否めまい。その差をどうやって補うつもりだ？」

「昼間に攻めるとは言っていない。夜ならば数の少なさも補える。もちろんデボネアとて夜襲は警戒していよう。だが昼間よりも警戒は薄れるはずだ。それも明け方寸前とあってはな」

ウォーレンとランスロット、リスゴー、ポリーシャ、それにマチルダがわずかに腰を浮かした。しかし彼らはアッシュを見やり、元騎士団長が微動だにしないでいるのを知って座り直す。

「文句があるのならば言え。だがあなた方の誰にもデボネアは倒せない。正攻法ではゼノビア城を落とすのに時間がかかる。スラム街の住人にできるだけ被害を出さないで済むような代替案があるならば聞かせてもらおうか」

しばし気まずい沈黙が流れた。特にウォーレンとランスロットは己の迂闊さを恥じ入るように見える。

「そなたの案に異論はない。だが、そなたにわしを同行させてはもらえぬか」

そう言ってアッシュが立ち上がり、腰の剣を抜き放った。

グランディーナも曲刀を抜いた。その刀身はアッシュの剣よりも長くて細い。

「腕試しか。良かろう、相手になる。下がれっ！」

言われるまでもない。二人が車座の中心に進み出たので輪は自然と大きくなった。

先に仕掛けたのはアッシュの方だった。その切れは牢獄にあってもいささかも衰えていないことを伺わせたが、グランディーナはこれを難なく受けた。

彼女は返す刀で斬りかかる。アッシュはこれを受け、両者は対峙した。

「デボネアに会って何をするつもりだ？」

「奴には借りがある。その礼を言っておかねばならんと思ってな」

アッシュがまた攻めたがグランディーナはそれをかわし、自分の攻撃に持ち込んだ。強引な攻めだ。だが速さが増しており、斬りかかる寸前で止めてはいるもののアッシュの反撃を許さない。

ランスロットは息を呑んだ。騎士団長アッシュはゼノビア一の剣の使い手であった。老いたりといえ、その冴えはますます鋭く、彼はいまだにアッシュにかな

わぬことを自覚する。だがそれならばグランディーナはどうだ。アッシュに匹敵する剣捌きの持ち主がゼテギネア帝国のヒカシュー大将軍以外にいただろうか。

「借りとは何のことだ？」

「わしはバイロイトの監獄で囚人扱いされていたのではない。そうさせたのがデボネアだ。騎士として敵ながら奴には敬意を払う。それが借りだ。奴がゼノビアにいるうちに、その借りを返したいと思っている」

アッシュの息が切れ切れになった。腕前は落ちていなくても牢獄暮らしで体力はそぎ取られているのだろう。とうとう膝をついたが、誰も近づくことができなかった。

グランディーナは曲刀を納めた。こちらは息も乱れていない。

「その体力では無理だな。敵のまっただ中に足手まといを連れていく余裕はない。

ランスロット、あなたが来るか？」

「わたしがだと？」

「そうだ。ゼノビア王国騎士団の生き残りのなかでもリーダー格だったのはあなたとウォーレンだろう。だからアッシュの代わりに来るかと言っている。それに私一人ではデボネアは生け捕りにしない。倒した方が楽だからな」

「良かろう。どういう風の吹き回しかは知らないがアッシュ殿の代理とあれば喜んで務めさせてもらおう。よろしいですか？」

「わしは意見を言える立場ではない。だがそなたの腕ならばグランディーナ殿の足手まといにはなるまい。頼んだぞ、ランスロット」

「一命に代えましても成し遂げてみせましょう。

ところでマチルダ、君は確かゼノビアの旗を持っていなかったかな？　せっかくの王都奪還だ。旗がなければ格好がつかないし、我々ゼノビア王国騎士団の存命を知らせる、いい機会だ」

言われてマチルダはうつむいた。彼女には珍しく、消え入りそうな声でつぶやく。

「旗はグランディーナに渡しました。ゼノビア王国の旗は使えないと言われて」

「どういうことだ？」

「我々は解放軍だ。ゼノビアの旗を掲げる所以はあるまい。いままではゼノビア領にいたからゼノビアの者ばかりが参戦してきたが、この先もそうとは限らない。ゼノビアの旗など使うな」

「では解放軍の旗があるのか？」

カノープスの予想に反し、皆の反発は意外と少ないようだ。いや、微動だにしないアッシュが元ゼノビア王国騎士団の面々の反発を抑え込んでいる。彼はそのことをはっきりと感じた。

ギルバルドに視線をやると彼も小さく頷いてみせた。

「カリナが持っている。持ってこさせよう」

だがグランディーナがその場を離れようとするより早く、ヴィリーが駆けてきた。若い戦士の中で一番年下なのでこういう使い走りをやらされることが多いが本人は意外と気にしていないようだ。もっとも、まさかグランディーナと同い年とは当人は思ってもいない。

「すみません。解放軍に参加したいって方々が来たんですけど、どうしますか？」

「どれぐらいだ？」

「全部で六人とドラゴンが四頭です。リーダーは騎士のバーンズと竜使いのライアンて人で」

「二人ならすぐ終わるな。一時休憩にしよう」

気がつくと陽は西にだいぶ傾いている。

グランディーナがヴィリーと去るのを追うようにマチルダがアレックとロギンスを誘って立ち、ポリーシャがアッシュの側に寄った。元騎士団長もさすがに幼児のころを覚えている彼女の気遣いは無碍（むげ）に断りにくいらしい。

「俺はおまえの補助だな」

「おぬしはゼノビア城に行きたがると思っていた」

「城の中は得意じゃねぇ。ゼノビア城は俺たち有翼人にも窮屈さを感じさせないところだったが、戦うとなれば話は別さ。だが二人は屋上から降りることになるだろう、俺の位置はそこらへんが妥当なところだ」

「だがアッシュ殿の言うとおり魔獣の数が足りない。夜間とはいえ、帝国軍が全軍投入したら厄介なことになるぞ」

「だから速攻で攻めたいんだろう。俺だって明け方の見張りは得意じゃねぇからな」

「それは皆、変わるまい」

「何だったらあたしのカボちゃんたち、貸してあげましょうか？」

「えぇ？」

カノープスの脳裏にくっきりはっきり浮かんだのはバルパライソでの一件だ。

パンプキンヘッドが自分の頭、つまり南瓜を蹴り上げると、それはたちまち巨大化し、放っておけば的を押しつぶしかねなかった。だがそれらの南瓜はグランディーナに見事に切り分けられ、頭を失ったパンプキ

ンヘッドたちは何もできなくなったのだ。しかし頭が補充可能とは思ってもいなかった。
「役に立つのか、あれ？」
「失礼ねぇ！　あの時は相手が悪かったのよ。あの娘は別、何ならいま、試してあげましょうか？」
「それも遠慮する。もっとも俺が飛んじまえば、巨大南瓜だろうと相手にはならないけどな」
「んまっ」
デネブは頬を膨らまし抗議するように唇を尖らせた。
そこへマチルダたちがお茶を持ってきたので一同は休憩し、ガーディナーのように一服する者もあった。魔女もすぐに機嫌を直す。
「マチルダさんてほんと気が利くわねぇ。それにお茶の点て方もお上手。これで美味しい砂糖菓子でも出てくれば言うことないんだけど」
「砂糖菓子は要らねぇが誰かさんとは大違いだな」
「同感ね。あの娘、日常生活だと苦労してそう」
「俺の言ってる誰かさんていうのは、とんがり帽子をかぶった誰かさんだよ」
「ほほほほ。何言ってるのよ、お姉さんの実力も知らないくせに。才色兼備とはあたしのためにある言葉よ。今度、特別な南瓜料理に招待してあげるわ」
カノープスは思わず手をデネブの頬に伸ばしたが、彼女はこれを避けて立ち上がった。
「何するのよ、いきなり?!」
「いや、おまえ、幾つなんだよ？」
「女性に年齢を訊くものじゃないわ。有翼人だからって無神経すぎ。女性にもてないわよ」
「何だと？　黙って聞いてりゃいい気になりやがって！　だいたいおまえは ――――」
「そこらへんでやめておけ」
グランディーナがカノープスとデネブのあいだに割って入った。デネブが勝ち誇ったように舌を出したがカノープスは取り合わないふりをする。
連れてきたのはカリナのほかに、騎士のバーンズと竜使いのライアンという新顔だ。
バーンズはランスロットやリスゴーと同じくらいの歳で、まずアッシュに気づいて驚いたように一礼した。対してライアンは三〇代半ばで特に誰とも知り合いではないようだったが、ふてぶてしい面構えだ。
「バーンズ＝タウンゼントとライアンだ。
話はもう終わりだが適当に座ってくれ。
カリナ、旗を出せ」
「了解」

彼はすぐに旗を掲げた。しかし風がなく青い旗は垂れただけだった。それでカリナは片手で柄を持ち、片手で旗を広げてみせた。もっとも広げたところで無地の旗だ。

「カリナ、ゼノビア攻めの時はカノープスに同行しろ。朝日にその旗が翻るようにするつもりだ」

「じゃあ、明け方攻めるんで？」

「暗いうちにな」

彼は拳を軽く握りしめ、旗をしまいなおした。早速、旗手の出番が回ってきたので興奮気味だ。

「ゼノビア城までの行程を聞いていなかったな」

「このままエルランゲンまで西進だ。明日の朝ここを発てば夜中に着く。実際は帝国軍の見回りもあるからもう少し遅くなるだろうが多少の強行軍になっても明日はエルランゲンに野営地を設営する。明後日の夜中に発てばゼノビア城には暗いうちに近づける。それから戦端を開いても三日目の朝には片づく」

息を呑む音がいくつか聞こえた。具体的な行程に初めてゼノビア城の奪還が現実のものとなったのだ。半分はそのため息、もう半分は気を引き締めなおしてのことかもしれない。

「エルランゲンまでの行程はライアンの部隊に先頭に立ってもらい、リスゴー、ガーディナー、ポリーシャ、バーンズ、あなた方が両翼を務めてくれ。アレック、あなたの部隊からはカリナ、カシム、エマーソンが一時的に外れる。リスゴーの部隊も人が足りない。あなたとオーサは明日はリスゴーに従ってくれ」

「承知しました」

リスゴーとアレックは同時に頷いたが、皆の視線がライアンに向いた。解放軍に加入早々、大事な役割を当てられたからだ。

「任せろよ。俺のドラゴンで帝国軍なんて軽く蹴散らしてやるぜ。帝国の奴らには俺もむしゃくしゃしていたんだ。この時のために手塩にかけたドラゴンだ。暴れさせてやるぜ」

「先ほど四頭のドラゴンと言っていたな。おぬしは四頭のドラゴンを使えるのか？」

「おうよ。この獣王ライアンさまにかかれば、ドラゴンだっておとなしくなるのさ」

「ほほぅ。わたしも魔獣を扱いだして長いが一度に四頭も扱うのは至難の業だ。ライアンとやら、是非おぬしの話を聞かせてもらえぬか」

「それはかまわねぇが、あいにくと俺はあんたの名前を知らねぇ。なにしろリーダーさんにそっちの騎士

さんといきなり連れてこられたんでな」
「それは気の毒なことをしたな」
言ってからギルバルドは豪快に笑った。憑き物が落ちた、とはこのような笑いを言うのだろう。カノープス、ニコラス、カリナはふと時間を二四年も戻されたように感じないではいられなかったほどだ。
「わたしはギルバルド＝オブライエン、解放軍の魔獣部隊の責任者を務めている。よろしく頼む」
「あんたがゼノビア王国の元魔獣軍団長か。さしずめ、そっちのバルタンは風使いカノープス＝ウォルフだろう？　俺はただのライアンだ。よろしく頼むぜ」
「おう」
それでライアンとバーンズを中心に人の輪ができた。バーンズはランスロットやリスゴーとは久々の再会を喜んでいたが、それはお互い様のようだ。
さすがのグランディーナもこれには苦笑いする。だがライアンとバーンズがうまく皆にとけ込み、作戦も受け入れられる好機を彼女が逃がすはずもなかった。
「自己紹介も終わったようだな。明日に備えて休め。エルランゲンまで強行軍になることを忘れるな」
「承知した」
アッシュが真っ先に立ち上がって敬礼し、デネブ以外が思わず倣う。それが解散の合図となった。
翌朝、解放軍はバイロイトの郊外を発った。
ゼノビア城の周囲は平原と森がほとんどだが、どちらも地味が肥えており、恵まれた土地である。グランディーナ王が八〇年前にゼノビアを首都に選んだのは、その出身であるシャローム地方に近いというばかりでなく土地の豊かさもあったとはよく言われることだ。
それほどほかの四王国の首都は恵まれていない土地が多い。そもそも全土にわたって雪の多いハイランド、砂漠が国土の半分以上を占めるオファイスは言うに及ばず、ドヌーブの首都バルモアは海抜〇バームの湿地帯、ホーライの首都だったバルハラは二四年前、ラシュディが一帯で使った魔法のためにハイランドのような寒冷地帯になってしまい、首都としての機能は失われた。ラシュディの魔力の凄まじさゆえか、一説には失われた禁呪を使ったという話もあり、ホーライ王国の主力はここで根こそぎ倒されたのだった。
禁呪とは自然さえ歪めると言われた太古の魔法である。使える者は現在では知られておらず、呪文の行方も知れない。

一方、四頭のドラゴンを先頭に立てた解放軍の歩みは順調だ。

ゼテギネア大陸に魔獣多しといえど最強の名はドラゴンに冠せられる。人が貫くには厚い鱗と、成長するに従って吐く息が凶暴なものとなる攻撃力は魔獣使いでなく専門の竜使いでなければ制せられるものではない。それでドラゴンを魔獣の括りに加えぬむきもある。

その体色は若いうちは明るい緑色と一様だが、成長するにつれて三色に色変わりし、その最終形態にはなかなかお目にかかれない。赤い体色のドラゴンは焔龍フレアブラス、白い体色のドラゴンは氷龍デスバハムート、黒い体色のドラゴンは邪龍ティアマットとして知られているが、ほかの大陸にはさらに多種のドラゴンが棲息すると言われていた。

ライアンの連れている四頭のドラゴンはメラオース、ブラックドラゴンのギャネガー、レッドドラゴンのマーウォルス、サラマンダーのプロミオスといい、いちばん大きなプロミオスはライアンが竜使いの師匠から譲り受けたという年嵩のドラゴンであった。

そんなドラゴンの最大の欠点は足が遅いことである。魔獣のなかでも遅さはいちばんと言ってよく、ゼノビア王国魔獣軍団に竜使いが一人もいなかったのもグラン王が機動性を重視したためだとは、その筋では有名な話である。

だが逆にそうした欠点を補うなり、拠点防御などドラゴンが有利になるような戦い方をするなりしてやれば、その戦闘力の高さは、どの魔獣にも勝って魅力的なものであることもまた確かだ。

グランやラシュディと並ぶ五英雄の一人、魔獣王ダルカスは三色のドラゴンを自在に使いこなした龍使いだと言われる。しかしその最後は五人のなかでも唯一知られておらず、いずこの国もその消息を伝えていない。ダルカスの死とともに龍使いという存在そのものが半ば伝説と化したのであった。

数度の戦闘を繰り返し、予定より少し遅れて解放軍はエルランゲン郊外に野営地を設営した。雲が出て、星も月もない晩だった。

案の定、夜明け前から雨が降り始めた。雨はこの季節には珍しく降り続き、翌日になっても止まなかった。

しかし白竜の月十三日の夜中過ぎ、グランディーナは予定どおりゼノビア城を攻めるべく指示を出した。

ウォーレンとデネブを先頭に合計七頭のグリフォンとコカトリス、それにワイバーンが発ち、西に黒々とした影を落とすゼノビア城に向かう。

エルランゲンからゼノビア城まではグリフォンで約二時間、城壁内のスラム街に灯はなく闇に沈んでいる。ゼノビア城の灯りも乏しく、雨のせいで見張りの手も多少緩んでいるようだ。

グランディーナはカノープスとエレボスに乗り、一路ゼノビア城を目指した。

ウォーレンの部隊とデネブは二頭のグリフォンとワイバーン、コカトリスに騎乗していた。ランスロットはギルバルドとともにもう一頭のワイバーン、プルートーンに乗り、グランディーナとともに城に侵入する手はずだ。

一行がゼノビア城の上空に到達するころには東の空がわずかに明るくなり始めていた。

天守を持たないゼノビア城は四角い城郭が内庭を作り二重の城壁を築いている。上空から見ると内庭に人影はなく、魔獣もいない。

城郭の四隅には塔が築かれており、城の入り口は南側である。そこと北側の城郭は東西よりも数倍厚く、城の主要な設備が集中している。特に王家の住居や玉座の間は北側の城郭にあって、グランディーナはそこから侵入することを伝えていた。いったん侵入してしまえば、城内は繋がっている。目指すデボネアもその中にいるはずだった。

にわかに北側の二つの塔の中が明るくなった。

屋上にはまだ誰もいない。

「ランスロット、続け！」

「承知！」

グランディーナとランスロットが続いて北の城郭に飛び降りた。

そこへ帝国軍兵士も現れた。ゼノビア城全体が急に慌ただしくなり、中庭に魔獣が引き出される。

屋上から城内への入り口は一つしかない。帝国軍兵士がさらに数人、続いて現れる。

「ごめんあそばせ！」

デネブが帝国軍を足止めするのと、ウォーレンの唱えた呪文が魔獣に炸裂するのとほぼ同時だった。

すかさずグランディーナが城に侵入する。ランスロットも続いた。

カノープスとカリナが城郭に降り、帝国軍兵士を捕獲、呪文の第二弾が間をおかず魔獣に放たれた。

ゼノビア城内は解放軍の奇襲に騒然としていた。

螺旋階段が階下に続き、足音が高らかに響く。

「ここは通さんぞ！」

「邪魔だ!!　ランスロット、下がっていろ！」

目にも留まらぬ速さで曲刀が振り下ろされた。グランディーナ自身ばかりかランスロットまで巻き込んで衝撃波が帝国兵に襲いかかる。

階上から放たれたそれは階下の兵士まで巻き込んで、十人近くをあっという間になぎ倒した。衝撃波と階上からの落下、階下にいて下敷きになったことなど、諸々の悪条件が重なって階段から廊下にかけては血塗られた修羅場と化した。

それらの帝国兵を避けてグランディーナが駆け下り、ランスロットも続く。

ゼノビア城は小規模な造りで三階しかない。玉座の間や王家の人びとの居室は最上階にあり、デボネアもそこを住処にしているだろうと考えられる。

廊下に出たグランディーナは迷わず玉座の間を目指し、立ちはだかった帝国軍の騎士を斬った。

「ぎゃあああっ！」

悲鳴に驚いたのはランスロットばかりではなかった。帝国兵もぎょっとしてのたうち回る騎士を見る。

右手が剣を握ったまま、あらぬ方に転がっていた。その元の持ち主とのあいだに立つグランディーナの刀は切っ先から血を滴らせている。

「次は誰が相手だ？」

彼女が進むと帝国兵の方が同じだけ後ずさった。

ランスロットはふと、戦いに慣れていないのが解放軍ばかりでないことに思い至った。

ゼテギネア帝国の時代になって二四年、帝国軍は旧王国の残党狩りに明け暮れたことはあっても、まともな戦闘の経験者は少ないのではないか。大陸全土は偽りの平和の下にあった。そのあいだにほかの大陸からの侵略がなかったのは紛れもない事実だ。

「どきたまえ！」

扉の開く音がして、若々しい声が聞かれた。帝国兵がかしこまり、やがて金髪を肩まで垂らした三〇歳そこそこおぼしき騎士が現れた。背はランスロットよりわずかに高いが線の細い印象を受ける。

「ゼテギネア帝国四天王が一人、クアス＝デボネア将軍だな？」

「そうだ。もしや君が噂に高い反乱軍のリーダーか。夜襲とは考えたな。だがたった二人で乗り込んでくるとは命知らずもいいところだ」

「言いたいことはそれだけか。あなたこそ、そのたった二人の私たちの前に姿を見せるとは、よほど命が惜しくないものと見える」

「おもしろい。反乱軍のリーダーは傭兵上がりと聞

いたが大した自信家のようだ。どれほどの腕前か、ひとつ、お手合わせを願おうか。その前に、投降の意志があるのならば聞いてやらないこともないぞ。どうだ、そちらの騎士は？」

「ゼテギネア帝国に尻尾を振るなど死んでもお断りだ。それにわたしの剣は彼女に捧げられている。騎士たるものが二君に仕えるなどできるものか」

「それにあなたが言うのはこちらの台詞だ。あなたが降伏すれば、こちらはこれ以上、戦闘を続ける理由がなくなる。ゼノビア城は我々解放軍がいただこう。もっともたとえ私たちが投降したところで、中央に戻る当てもないあなたが、どう上層部に口を利いてくれるのか興味がなくはないがな」

デボネアの表が屈辱に青ざめた。端正な顔立ちが怒りに歪む。

「生意気を言うな！　神聖ゼテギネア帝国の名にかけて反乱軍に降伏などできるものか。君たちの方こそ、君が倒されれば一巻の終わりではないか。しょせん反乱軍など烏合の衆だ。帝国にかなうはずがないと思い知るがいい」

しかしグランディーナはさらにせせら笑って曲刀の切っ先をデボネアに向けた。

「私が倒されればだと？　四天王というのは剣よりも口が立つ奴が選ばれるらしいな。自分と相手の力の差もわからぬくせにでかい口ばかりたたくものだ。あなたに私が倒せると思っているのか！」

言うや否や彼女はデボネアに斬りかかった。

将軍もすぐさま長剣を抜いて応戦したが、反応が遅れたこともあって防戦一方だ。

左。右。

それほど広くもない廊下に激しい剣戟の音が響く。

上、下。

デボネアの動きはまるで剣術の見本だ。時に避け、時に受け、グランディーナの攻撃を交わしきった。

「大きな口をたたいておいて君の腕前はその程度か。次はこちらからいくぞ！」

「させるか！　だから口だけだと言う。あれが私の攻撃の全てだと思ったか！」

彼女はデボネアに反撃を許さない。その動きが速くなる。先ほどは全てデボネアに回避、あるいは防御されきった攻撃が今度は五回に一回、四回に一回と頻度を増して当たるようになった。三回に一回、二回に一回、その速さにデボネアがついていけなくなる。音速剣と言われた彼が太刀筋の速さで負けているのだ。

デボネアも強引に攻撃に転じようとするが、その隙を与えない。彼が繰り出そうとする手を寸前で止める。

四天王と呼ばれ、ただ大将軍以外には負ける相手などなかったはずのデボネアは、ゼノビアなどという田舎で反乱軍のリーダーと嘯く小娘に負けるはずがなかったのだ。ゼテギネア帝国軍に入った時から順調な出世街道を歩み、ついに四天王という帝国軍次鋒にまで上ってきたはずだのに逆に彼の道はそこから狂いだした。

生まれて初めて謁見のかなった神聖ゼテギネア帝国の女帝エンドラ、だが憧れの女帝は彼を冷たい眼差しで見下し、口をきいた、ただその一回で不興を買った。

「我が治世も早二二年を数えた。フィガロ、デボネア、四天王が代替わりするのは初めてのことじゃ。二人とも顔を上げよ。そなたたちの感ずるところ、妾に忌憚なく申してみよ」

ともに四天王に選ばれたカラム＝フィガロとは軍に入ってからの無二の親友同士、エンドラに憧れたという点では共通するところの多い二人だったが、デボネアは先に女帝への崇敬の言葉を並べ、そのために生涯、独身であることさえ誓ったフィガロが言うのをどこか遠いところで発せられているように感じていた。

「恐れながら、畏き女帝陛下、ガレス殿下、賢者ラシュディ殿に申し上げます ――――」

「戦闘中にいらぬことを考えるとは余裕だな！」

「うっ！」

音速剣ソニックブレードが弾き飛ばされた。ハイランド王国の北方、永久氷原に眠る天竜ディバインドラゴンの鱗を削りだして作られた剣、デボネアの身を守り、ともに戦い、大将軍ヒカシュー＝ウィンザルフ、四天王デニス＝ルバロン、アルフィン＝プレヴィア、フィガロ以外の攻撃では決して動じなかったソニックブレードが、何者とも知らぬ反乱軍のリーダーが振るう無名の刀に力負けしたのだ。

「わたしの、負け、か？」

「そうだ。部下たちに降伏するよう伝えろ。それぐらいの元気は残っていよう」

言うまでもなかった。デボネアも含めていま、この場にある負傷者は全てグランディーナの手になる者だ。そして誰も治療されていない。

「立て。あなたに会いたがっている者がいる。あなたの処分はそれから決める」

戦意を喪失した帝国軍のなかを抜けてグランディーナとランスロットはデボネアを連れて屋上に戻った。

ギルバルドが事情を察してプルートーンを着地させ、カノープスが呼ぶとエレボスがやってくる。
「わたしをどこへ連れていくつもりだ？」
「アッシュ＝クラウゼンを知っていよう。彼があなたに会いたがっている」
「アッシュ＝クラウゼンだと？」
デボネアは呆けていたが、その名に期すところがあったのか急に顔つきが変わった。
「すまないが敗軍の将として先にやるべきことをやらせてもらえないか。それほど手間はとらせないと思うが、部下たちをこのままにしておけない」
「そういうことならば手伝いはいるか？」
「君たちの手を煩わせるほどではない。だが負傷者も少なくないだろうから僧侶がいてくれると助かる」
「良かろう。
ギルバルド、マチルダとミネアを連れてきてくれ。できるだけ速く頼む」
「承知しました」
「ありがとう」
デボネアはとても敗軍の将などとは思えないような明るい笑顔を見せて礼を言うと、城下に降りていった。
ギルバルドがプルートーンに騎乗し、クロヌスを連れて飛び立つ。昨夜の場所から動いていなければ、往復で四時間はかかるはずだ。
「意外と骨のある奴だな。伊達に四天王ではないってことか。しかし俺たちはどうするんだ？　まさかデボネアのやることが終わるのを待ってるなんて言うんじゃないだろうな？」
「放っておくわけにもいくまい。あなたたちは先に皆と合流しろ。私には見届ける義務がある」
「君が残るのならば、わたしも残ろう」
ランスロットがそう言ったので、ウォーレンとカノープスは頷きあった。
「俺はどうします？」
役目のなくなったカリナがおもしろくなさそうに言う。この状況で旗を掲げても目立たなさそうだ。
「帝国旗をいつまでも掲げておく義理もないな。その旗と取り替えるか。旗はまた作らせる。同じ生地を買って、旗にあつらえておけ」
それでカリナが旗を交換するのを待って、グランディーナとランスロット以外の者は野営地に帰還することになった。
デボネアを待つあいだ、グランディーナは屋上から眼下のスラム街を眺め、ランスロットもつき合う。

彼が覚えているゼノビアの街は家並みと街路が整然と並ぶ美しい都であった。だが建てられるだけ建てた掘っ建て小屋の並ぶスラム街にその面影は微塵もない。ゼノビアの復興には時間がかかりそうだ。そもそも元のような整然とした町並みを取り戻すことがいいのか、新しく生まれ変わるべきなのか。

「この先、わたしたちはどうするんだ？」

「アヴァロン島、その後はディアスポラだ」

「ゼノビアのことはどうする？」

「復興でもしろと言うのか。そんなことを始めれば一ヶ月かかっても終わらないし、そのあいだに帝国に反撃されればゼノビアぐらいではひとたまりもない。気にかけるだけ時間の無駄だ」

「そうだな。我々の目的はゼテギネア帝国を倒すことだ。ゼノビアで足踏みしているようではいけないのだったな」

「残りたいのならば言え。脱落者が出るのは覚悟の上だ」

「馬鹿な。わたしは最後までつき合うさ。そういえば、君はどこの生まれなんだ？」

「藪から棒にそんなことを訊いてどうする？」

「ただの好奇心だが、二四年ぶりにゼノビアに帰ってきて、わたしも郷愁にかられたのかもしれないな」

「ならばそこで止めておけ。要らぬ好奇心は身を滅ぼすぞ」

ランスロットは己が耳を疑ったが、彼女はちょうど出てきたデボネアの方へ向かっていた。

「待たせてすまないな。荷の片づけにもう半日ぐらいかかりそうだが、とりあえずするべきことは指示した。城の明け渡しにはわたしの副官にスティングという男がいるから彼に任せてある。後はどうなりと指示してくれ」

デボネアの後から出てきた騎士が一礼した。アレックぐらいの歳で薄い茶の髪と白い肌がいかにも北国ハイランドの人間らしい。

「デボネアにはつき合ってもらうが、あなた方は勝手に帰るがいい。捕虜を取るつもりはない。だが帰る時はそこのスラム街を通っていってもらおう。住民に止められるも素通りできるも、あなた方のしたことの結果だ。それと食糧が余るようなら住民に分けてやれ。私の指示はそれだけだ」

デボネアもスティングもしばし呆気に取られた。

「本当にそれだけか？」

「捕虜をとっても交換する相手がない。吊し上げる

趣味もない。ゼノビアを取ればあなた方に用はない」
「傭兵らしい実用的な意見だな」
だがそこへ意外に早くマチルダとミネアが到着した。
「遅くなってすみません。ギルバルドさまにお手伝いするよう言われてきたのですが何をすればよろしいのでしょうか？」
「彼はスティングだ。元帝国軍の副官だが、彼の指示に従ってくれ。ランスロット、あなたも手伝え。私はデボネアをアッシュのところに連れていく」
「いえ、私たちだけで大丈夫です」
「騎士が女子どもを人質に取るのはいくらでも見てきた。この期に及んでとは思うが念のためだ」
「承知した」
ミネアはさらに恐縮していたが、グランディーナは取り合わず、三人に背を向けた。
ランスロットがスティングを見ると、騎士は特に気を悪くしたようでもなく、マチルダたちを城内に案内していく。
ギルバルドが黙ってプルートーンの手綱をグランディーナに渡し、クロヌスに乗り換えた。デボネアは大きい方のプルートーンに騎乗し、二頭のワイバーンはすぐに飛び立つ。

「我々のことを信用してはいないというわけか」
「念のためと言った。それにあそこまであからさまに言われて人質を取るような度胸があるのか」
「そうかな。わたしも伊達に ――― 」
突然プルートーンが空中で反転し、デボネアは放り出された。
デボネアはもとよりギルバルドも口の中で悲鳴をあげたが、完全に不意をつかれてクロヌスは間に合わない。だいいちプルートーンはそんな無茶な飛び方はしないよう訓練したはずだ。
しかしグランディーナは最初からそのつもりだったらしく、悠々とワイバーンを操って落下するデボネアを受け止めた。
そのあいだにギルバルドは地面に光る物が落ちるのを認めた。デボネアはと見ると、プルートーンの背で言葉もないようだ。心の準備もなく空中に放り出されれば無理もないと言いたいところだが、二人の会話を聞いていないギルバルドにはグランディーナの行動が理解できなかった。
二頭のワイバーンはその後は何事もなく解放軍の野営地に向かったが、デボネアの顔色はずっと、気の毒なくらいに青ざめたままであった。

「着いたぞ」
待ちかねたようにアッシュが近づいてくる。ほかの者は騎乗鞍に腹這いになっているデボネアを興味深そうに眺めている。
「何かあったのですか？」
「自分の立場を思い知らせてやっただけだ。手綱を取っているのがこちらだというのに短刀を出すような奴だとは思わなかった」
ギルバルドはデボネアを盗み見た。ゼテギネア帝国四天王はやっとワイバーンを降りたところだが足下がまだふらついている。
「デボネア、一年ぶりだな。そなたのおかげで生き延び、こうして帝国と戦うことができる。礼を言う」
「礼？　わたしは礼を言われるようなことはしていない。牢獄に繋がれていた二〇年以上に比べれば、たかだか一年など贖罪にもなりはすまい」
「己のしたことを贖罪と言うか。ならば、そなたに訊きたい。陛下を暗殺したのは誰ぞ？　そしていま一度そなたに問う。正々堂々と戦いを挑んで負かすならばいざ知らず暗殺などという卑怯な手段を使い、ゼノビアの民を次々に処刑し、恐怖政治を大陸全土に布いたゼテギネア帝国に正義有りとなお考えておるのか。答えよ、クアス＝デボネア、正義はいずこに有りや？
一年前そなたは女帝を信じるのみと言ったな。いまも、その心に変わりはないのか？」
「ないと言えば嘘になる。ゼノビア一つを見ても帝国のやり方には疑問を感じざるを得ない。かつての四王国を滅ぼしてハイランド王国が理想的な国家に統一したのであれば、なぜ民はいつも我々を恐れ、脅え、疑いの眼差しを向けるものか。だがわたしは軍人だ。わたしはあなたがいまでもグラン王ただ一人に忠誠を誓っているようにエンドラ陛下に忠誠を誓い、剣を捧げた身、わたしの仕事はエンドラ陛下の剣となることであって陛下のなさることに口出しをすることではない。わたしの忠誠はただエンドラ陛下のためだけにあるのだ」
「ならば正義は帝国に有りや？　答えよ！　それにそなたはわしのもう一つの問いに答えておらぬぞ。陛下を暗殺したのは誰ぞ？」
「グラン暗殺の真犯人はわたしも知らない。だがわたしは、正義は ――――」
「理想なき国がそなたたちハイランドの目指したものか？　それがエンドラの、ラシュディの命令か？　ヒカシューの命令か？　答えよ、デボネア。そなたは

我々を反乱軍と言う。だが平和を乱しているのは我々か、そなたたちの国か？　正義がどちらの側にあるのかそなたはわかっていよう。わかっているからゼノビアに左遷されたのではないのか？　わかっていたからエンドラに進言し不興を買ったのではないのか？」

「うるさい、黙れ！　それ以上、陛下や大将軍を侮辱することは許さないぞ、アッシュ」

「ならば帝国に非有りと認めるのか？　正義が帝国になしと認めるか？　そなたの剣は誰がために振るうのだ？　正義なき女帝のためにそなたは殺戮も厭わぬと言えるのか？　正義なき剣を振るうことがそなたの騎士としての誇りか？」

「黙れ黙れ！　ならばエンドラ陛下にいまいちど我が剣と我が誇り、我が命を懸けてお訊ねする。この大陸を治めるのはエンドラ陛下ただお一人、神聖ゼテギネア帝国こそ選ばれたただ一つの国家なのだ。だがこれ以上あなたたちと話すことはない！　さらばだ！」

「待て、デボネア！」

過去にどんな者でも、いまのデボネアのような見事な逃げっぷりを見せたことはないだろう。そう思わずにいられないような消え方だった。それもポケットから拳大の石を取り出したと思った瞬間のことで声を上げる間もなかったほどだ。

解放軍一同は呆気に取られ、たったいままでデボネアのいた場所を見つめた。グランディーナでさえこんな事態は予想外という顔をして、誰一人言葉もなかったが不意に哄笑したのはアッシュであった。つられて皆が笑い出したが、グランディーナはやはり笑うことがなかった。

「指揮官が一人逃げたところで何をするつもりだ。ゼノビアも部下も失って、戻っても裏切り者と誹られるのが落ちだということも気づかないとは」

「そうなると思われますか？」

こちらもほとんど笑わず、ギルバルドが訊ねる。いつの間にかカノープスとユーリアも近づいていて興味津々という顔だ。

「ならないと思う方がどうかしている。四天王など手柄を立ててこその地位だ。だが逃げたものはしょうがない」

彼女が手を挙げると笑い声がやみ、一斉に視線が集まった。誰もが明るい顔で解放軍のリーダーを見ている。それはデボネアのことばかりでなく、目的地の一つに達した喜び、ゼノビア王国残党を自認する者たちにとっては長年の願望を果たした喜びもあったろう。

「ご苦労だった。明日はフィラーハからアヴァロン島に渡り、ロシュフォル教大神官フォーリス＝クヌーデルさまにお会いする。ロシュフォル教の認可が得られれば、この先の戦いで心強いことになろうし、我々の正当性も高まる。今日は休め」

もっとも休めと言われても今日も野宿であろうことは容易に察せられる。それだけにどこか、いつもと変わらないような、いつもより浮き足だったような空気が野営地全体に漂っていた。

「ウォーレン、カノープス、アッシュ、休む前に私につき合え。

そのあいだ、こちらはギルバルド、あなたに任せる。ポリーシャ、バーンズ、あなた方もゼノビア城まで一緒に来てくれ。

ロギンス、グリフォンとコカトリスを使いたい。休ませたか？」

「ええ、十分に。ワイバーンはよろしいのですか？」

「ゼノビア城まで何回も往復させている。少し休ませよう。ゼノビア城にランスロットがいる。ポリーシャとバーンズはそこで彼に交替してくれ。行くぞ」

「承知しました。どこへ行かれるのです？」

「カルロバツで確かめてもらいたいことがある」

「お気をつけて」

指名された者は五頭のグリフォンとコカトリスに分乗した。ポリーシャとバーンズはグリフォンに乗るのは初めてなもので相当緊張した顔つきだ。

スラム街の上を飛んでいる時にアッシュとポリーシャは驚き、嘆くような顔をしたがその思いを口に出しはしなかった。

ゼノビア城でランスロットとポリーシャ、バーンズが交替したが、帝国軍副官のスティング＝モートンはデボネアが逃げたことを知ると怒り心頭といった顔つきになった。

「わたしを解放軍に加えてくれないか」

「あなただけか？」

「いや。ほかに希望者がいれば受け入れてもらえるのか？　皆の意見は聞いていないのだが」

「祖国に弓引く気があるのなら歓迎する。だがあなたの目的はそんなことではなさそうだな」

「君たちとともに行けばいずれデボネア将軍に再会できるだろう。その時に今日の真意を確かめたいのだ。誇り高きゼテギネア帝国の軍人が負けたとはいえ敵に背を向けるなど、いったい何を考えているのだ。それ

でもかまわないか？」
「ゼテギネア帝国を倒すのが我々の目的だ。その気がないのならば断る。デボネアの逃げた理由など興味がない。一時的にでも帝国の者と馴れ合う気はない」
スティングは呻いた。だが彼は長く迷っておらず、すぐに頷いてみせる。
「わかった。わたしもこれ以上、帝国に未練はない。解放軍のために働こう」
「ゼノビア城外壁の門を四つとも開け放て。南門を出たところに我々の野営地がある。そこで待っていろ。ギルバルドには私から言われたと伝えろ」
「承知した」
ランスロットはアッシュと交替してシューメーに乗り、アッシュがエレボスに乗って一行はさらにゼノビアの西、小島にあるカルロバツを目指した。
「カルロバツになど、どんな用があるのだ？」
「あなた方に確かめてもらいたいことがある。それはあなた方にとっては朗報のはずだ」
アッシュはそれ以上、問わなかった。
ゼノビア城の外壁を越えるとまもなく海となり、その海は北方にアヴァロン島、カストラート海の諸島が続く。カルロバツは孤島の中央に位置する田舎の町で空から渡る以外にはゼノビアの南に位置するフィラーハからの海路を使うしかないので見た目以上の距離が二つの都市のあいだには横たわっていることになる。
フィラーハはアヴァロン島との定期連絡船を有する港町で、カルロバツはその途中になる。大陸全土が戦乱に巻き込まれた二四年前にも、その連絡船が途絶えることはなく、多くの人びとが難民となってアヴァロン島に逃れ、ロシュフォル教会大本山の庇護を求めた。アヴァロン島はフィラーハから三日ほどだ。
やがてカルロバツの町が見え、グランディーナは郊外に着陸させた。ゼノビア城で今朝方あった戦闘も知らぬような、のどかな町だ。あるいはこの町は二四年前も変わらずにたたずみ、時の流れから置き去りにされているのかもしれない。思わず、そう錯覚しそうな田舎なのである。
「カルロバツに来たのは初めてです。いったいここに何があるというのですか？」
「誰も来たことがないのか？」
ウォーレンばかりか皆が一斉に頷いた。
「親戚も知り合いもないのにこんなところに来るかよ。空を飛んでるからゼノビアから近いように感じるけど本当はもっと遠回りなんだぞ」

「知っている。誰も知り合いもいないのならば、あなた方の名を利用させてもらおう」
「何だ、そりゃ？」
ほかの町に比べると申し訳程度の外壁が町を囲んでいた。だがその戸は閉ざされ、真っ先にグランディーナが近づくとちっとも兵隊らしくない若者が小窓から顔をのぞかせる。
「この町に旧ゼノビア王国の貴族がいるだろう。我々は解放軍、旧ゼノビア王国騎士団、魔法軍団、魔獣軍団の者たちだ。取り次いでもらいたい」
「何だって？」
アッシュが門に近づいた。
「わしはゼノビア王国元騎士団長アッシュ＝クラウゼン、恥を忍んでそなたに頼む。そのようなことならば門を開けてくれ。聞きたいことがある」
若者の顔が引っ込んで、また顔をのぞかせた。
「あとは誰がいるんだ？」
「俺はカノープス＝ウォルフ、あっちの爺はウォーレン＝ムーン、騎士がランスロット＝ハミルトンだ」
「一度に言わないでくれ。書ききれない」
「書ききれない？」
それで全員の名前を順に伝え、最後は解放軍のリーダーとしてグランディーナが名乗りを上げた。
門の向こうが賑やかになり、また小窓が開いたのはしばらく経ってからだ。
「クラウゼン卿！　アッシュ＝クラウゼン卿ではありませんか！」
「そなた、バーデンドルフ殿か？」
「お待ちください、すぐに門を開けます。早く開けてくれ、大事な方がお待ちなのだ。待たせるでない」
聞こえた声は年寄りのものであった。さらに門が開けられると先ほどの兵士のほかに貴族然とした老人が数人いて、うち一人だけ女性であった。
アッシュはたちまちそれらの人びとに囲まれたが、せっかく伝えたのに、ほかの者の存在はまったく忘れられたらしい。
意外なのはあれだけ喧伝されたアッシュのグラン王暗殺の罪が責められないことだ。会話の切れ切れからは彼らもまたアッシュの冤罪を信じていたらしいことを伺われた。もっとも、その冤罪を晴らすために彼らが何かをした、というわけでもなかったようだ。
「クラウゼン卿、そちらの方々を紹介していただけませんか。あなたのお名前だけを聞いて飛んできたも

のですから」
振り返ったアッシュは真っ先にグランディーナを指した。
「解放軍のリーダー、グランディーナ殿だ」
「おお、聞いたことがあります。打倒ゼテギネア帝国を掲げる元ゼノビア王国騎士団がヴォルザーク島で兵を興したとか。やっとゼノビアまで来たのですか」
「今朝、ゼノビア城を解放したばかりだ」
グランディーナの言葉に老人たちは感嘆の声をあげ、往事を懐かしむように互いを見合った。
「それでは我々も近いうちにゼノビアに戻れますな。ご苦労でした、皆さん。これで後は ――― 」
「皇子が帰ってくれれば我々は用無しというわけか」
「どうしてそれを?!」
「なんですって?!」
「皇子が生きておいでなのですか?!」
「いつから知ってたんだ?!」
「どういうことです?!」
叫ばなかったのは婦人だけだ。それぐらい皇子生存の事実は彼らには重要なことであると言えた。だが興奮している解放軍の面々と異なり、老人たちが驚くのは、自分たちのとっておきの秘密がすでに知られたものだったということだろう。
「ここにはその事実を確かめに来た。お互いに手間が省けたな。帰るぞ」
「お待ちなさい。殿下のご生存を知ってどうするつもりです？」
老婦人が毅然とした口調で引き留める。白髪を頭の上に結い、淡い色調の服が優しげな印象を与えるが、その眼差しは居並ぶ老人に勝るとも劣らぬ頑固な貴族主義のものだ。
「どうもしない。彼らは旧ゼノビア王国縁の者だ。皇子が生きているのが確実ならば気合いも入るだろう。そう思って来た。それとゼノビアに戻るのは勝手だが、スラム街の住人はしばらく去らないだろう。その帰還、復興を手伝ってもらえるのなら助かる」
老婆は眉をひそめた。老人たちも急に冷めた様子でグランディーナを見る。
スラム街のことも復興のことも考えていなかったという顔だ。そんなものは自分たちの仕事ではないしゼノビアに戻る時には全てが片づいていて当然という顔だ。人を使うことには慣れていても自らの手では食糧も取ったことがない者の顔だ。二四年という歳月は彼らの本質を変えるには至らなかったのだ。

「戦争屋に町の復興など当てにするな。あなた方の町だろう、あなた方の手で立て直したらどうだ」
「どこの馬の骨ともわからぬあなたにそのようなことを指図される覚えはありません。
トリスタン皇子はアヴァロン島に向かわれました。クラウゼン卿、この先、殿下にお会いすることがあれば、この鍵をお渡し願います」
彼女は頭を聳やかし精一杯の威厳を保って、その貴族性が理解できる唯一の人物と判断したアッシュに接した。渡された鍵はどこぞの倉庫でも開けられそうな大きなもので厚い鉄製だ。
「これは栄光の鍵、陛下の世継ぎの証です」
「おお、ついにその鍵を殿下にお渡しする時が来たのですな」
「そうです。悪しきゼテギネア帝国を倒し、この大陸を立て直せるのは神帝グラン陛下のただ一人の正当な血筋の持ち主、フィクス＝トリシュトラム＝ゼノビアさまをおいて、ほかにありえません。それとも何か、あなたがゼテギネア帝国を倒し、国を興す権利があるとでも言いますか？」
「そんな気はない。皇子の生存を喜んでいるのは彼ら以上だ。だがゼテギネア帝国を倒すのとその後に国を興すのとではまるっきり別次元の問題だろう」
「戦争屋らしい言い分ですこと。口では何とでも言えましょう。傭兵など何が目当てかわかったものではありませんからね」
「そうだ、クラウゼン卿を差し置いて傭兵がリーダーなど厚かましい話ではないか」
「恐れながら申し上げます！」
ランスロットが進み出たが、それはカノープスよりほんの少し速かった。
「彼女は我ら、ゼノビア王国騎士団の残党が解放軍のリーダーに望み、その大任をゼノビアまで果たしてきてくれたのです。この先も彼女なしに帝国と戦い抜くことはできますまい。解放軍の一戦士として、彼女に剣を捧げた者として、何よりゼノビア王国に忠誠を誓う騎士として、それ以上の侮辱は許せません」
「ぶ、無礼な！
クラウゼン卿、騎士団といえばあなたの部下でありましょう。そのような若輩者が団長を差し置いて私たちに意見するなど許されると思っているのですか？」
「わしは元騎士団長と申し上げた。それに解放軍のなかでいえば、わしはつい三日前に加わった若輩者、最初から解放軍を支えてきたランスロットの功には遙

かに及ばぬ。バーニャ殿、皆の衆、栄光の鍵は必ず殿下にお渡しいたす。次にお目にかかる時は必ず殿下をお連れしよう。わしに免じて、ここはお引き取りを」

バーニャは顔を赤らめてアッシュ、グランディーナ、ランスロットと睨み回したが、彼女のなかではグランディーナとランスロットを罵倒する気持ちよりもアッシュを敬う気持ちの方が勝ったものとみえた。

「良きにお計らいを、クラウゼン卿」

そう言ったのは精一杯の強がりであったろう。

「殿下をお頼みしますぞ」

「殿下をお連れくださるというお約束、お忘れなきよう願いますぞ」

「心得ております、皆の衆。朗報をお待ちあれ」

そして彼らは頭を高く保ったまま立ち去った。

「変わってないな、あのお歴々は。ゼノビア王国の再建は本意だがあの連中があのまんま戻ってくるのはいただけないな。

ところで見直したぞ、ランスロット！　おまえががつーんと言ってくれなきゃ、俺が言ったところだ。

それにしてもらしくないじゃないか。あれしか言い返さないなんて」

「傭兵がよく思われないのはいつものことだ。慣れている」

「そんなことに慣れてんじゃねぇよ。まぁ、らしいと言えばらしいけどな」

「しかしゼノビアの復興は確かに頭の痛い問題ですね。スラム街の住民も元を質せば同じゼノビア人です。我々がゼノビア領を解放したことで故郷に戻る気になってくれれば話が早いのですが」

「だがスラム街がなくなってもゼノビアが元に戻るわけではあるまい。シャローム地方もそうだったが略奪や破壊の憂き目にあっていない屋敷はないし、それこそ、あの方々が納得はするまい。それに城もだいぶ荒れていた。昔のように復興など、いまのゼノビアを見ればとても無理な話だ」

「なるようにしかなるまい。わしらにはゼノビアで立ち止まっている時間はなかろうからな」

「アッシュの言うとおりだ。戻るぞ」

「おまえ、それでギルバルドに来るよう言わなかったのか？」

「そういうわけじゃない。皇子のことは知っていたが、ああいう貴族までは予定外だ。だがギルバルドはいまさら皇子がいたところで喜びはすまい」

「そうかもしれねぇな」

グランディーナがエレボスに乗ったので皆がそれぞれ行きに乗ってきた魔獣に騎乗する。
空中でウォーレン、ランスロット、カノープスは思わずカルロバツを振り返った。
トリスタン皇子の存命は確かに喜ばしいことだ。だがその秘密を守ってきたバーニャをはじめとする貴族たちの存在は、彼らをしても新たな火種となりそうな予感ではあった。
彼女らが解放軍の野営地に戻ったのはその日の夜のことで、新しく加わった元帝国軍のスティングたちも交えてささやかな宴が張られた。
旧ゼノビア王国第二皇子フィクス＝トリシュトラム＝ゼノビアの生存は王国縁の者にとっては確かに朗報であり、新たな気合いの種でもある。
だがグランディーナからそのことを聞かされたギルバルド＝オブライエンは、一人浮かれることもなしに目を伏せたのだった。

翌日、解放軍はフィラーハに向かった。白竜の月十五日にはアヴァロン島に向かう船に乗り込み、カルロバツを経由しながら三日の船旅を過ごす。
カストラート海に浮かぶアヴァロン島は、五英雄の一人、僧侶ラビアンを生み出した聖地であり、やはり五英雄の一人シャロームの皇子ロシュフォルが太陽神フィラーハを崇めるロシュフォル教を興したところでもある。
二四年前、戦乱の嵐がゼテギネア大陸全土を吹き荒れた時も、ただアヴァロン島だけは逃れ、大勢の難民が助けを求めた。神聖ゼテギネア帝国が興り、各地のロシュフォル教会を弾圧、ゼテギネア教会を興した時にもアヴァロン島は中立を守り、帝国もこの島には本格的に侵攻しなかった。
だがゼテギネア大陸の東端から起きた反帝国の動きは、この聖なる島にも無縁ではいなかったのである。